人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

栃木県芳賀郡茂木町

○学校名

茂木町立中川中学校

○学校のＵＲＬ

http://www.motegi-tcg.ed.jp/gakkou_kyouikuka/Nakachu/

２．学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各１学級、【特別支援学級】１学級、【合計】４学級

○児童生徒数

【全生徒数】７２人(平成 23 年 12 月１日現在)
(内訳：１年生２１人、２年生２０人、３年生３１人)

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
「自ら学ぶ生徒」「心豊かな生徒」「たくましい生徒」「ふるさとを愛する生徒」
【人権教育に関する目標】
(基本目標)「高め合い、共に生きる生徒の育成
～豊かな人間性を育成する活動を通して～」
(重点目標)「実態把握と人権意識を高める啓発活動の工夫」
「コミュニケーション能力の育成」
「道徳教育と学校行事を結びつけた豊かな人間性の育成」
「生徒の自主的な活動を通した自尊感情の育成」
「共に生きる社会を担う生徒の健やかな心と体つくりの工夫」

○人権教育にかかる取組の全体概要

○　学校の教育活動すべてを通じて実施する、系統性を重視した指導計画の効果的実践

学校経営組織を生かし、研究推進・調査・啓発チーム、確かな学力育成チーム、豊かな心育成チーム、生き方指導チーム、健やかな体育成チームの五つの教職員チームで活動している。学校教育目標、人権教育目標をもとに、チームごとの目標を定めた。学校経営組織を生かすことにより、全教育活動を通じて人権教育を系統的に実践することができる。

○　生徒の自主性を尊重し、自尊感情を高めさせる指導方法の工夫

生徒の自主的な活動を行うには、コミュニケーション能力と、その話合いを

まとめ活動を牽引するリーダーが必要となる。また、自主的な活動の機会に比例して多くのリーダーが必要となる。しかし、小学校から９年間単学級で、しかも同じ生徒だけで生活している本校の場合、リーダーとなる生徒は自ずと決まってしまいがちである。そこで、学校行事、学年行事において実行委員会を組織し、多くの生徒がリーダーとして活動する機会をつくるようにしている。学級の中で役割分担等をする場合も、くじ引きやじゃんけんをさせずに、できるだけ話合いで決めるようにすることにより、コミュニケーション能力とリーダーシップが高められるようにしている。また、生徒に自主的活動させ、成功体験をもたせることにより、自尊感情を高めさせたいと考えている。

○　人権教育推進に関する点検・評価アンケートの教職員・生徒・保護者への実施及びその結果の分析活用

昨年度末に実施した教職員・生徒・保護者対象のアンケート調査を分析することにより、昨年度の実践に対する点検・評価を行った。その結果から本校の問題点を洗い出し、今年度の重点目標を設定した。また、年度初めには新入生・保護者対象のアンケートを実施し、分析することにより実態を把握した。

○　家庭・地域との連携、校種間連携

・人権だよりによる家庭・地域への啓発
・人権ワークショップ、人権コンサートへの保護者・地域の方々の参加
・ＰＴＡ人権講演会への生徒及び地域の方々の参加
・授業参観時の親子による人権ワークショップの実施
・土に親しむ活動(学校農園)における地域教育力の導入
・環境学習出前講座、那珂川河川敷清掃における地域との協働
・地域クリーン作戦への参加

３．特色ある実践事例の内容

◆地域との協働による環境学習を利用した人権教育の実践

(取組のねらい、目的)

郷土を流れる那珂川は自然豊かな美しい景観をつくり、地域のシンボルであり誇りである。そして大切な観光資源でもある。生徒の多くが那珂川を愛し大切にしようと考えている。この清流を守ることはここに住む生徒たちの願いであり、かつ使命でもある。しかし、一部の釣り客のマナーの悪化や廃棄物の不法投棄に流域の工業発展や人口増加も加わり、水辺の環境とともに水質も悪化しつつある。

そこで、Think Globally,Act Locally の観点から、流域の人々が、そして水が流れ込む太平洋、さらに世界の海に暮らす人々が美しい環境の中で生活していく権利を守るためには、まず自分たちの手で清掃や水質浄化に取り組み、釣り人や地域の方々への啓発を行うことから始めることが必要であると考える。

また、この取組においては、地域の教育力による支援を仰ぐため、那珂川の関係者や地域の方々と共に活動することが大切である。それは、地域の方々との協働により、地域の実態に合った指導を仰ぎつつより効果的な活動をすることができるとともに、地域との関わりを強化し、地域の結束や発展に寄与しようとする意識もも

たせることができると考えられるからである。

このような地域との協働による自然環境を保全するための体験活動を生徒自らの手で実践させることにより、環境権の享有と保持に対する認識が深まると考えられる。また、自尊感情や連帯感を高め、豊かな人間性や他者の痛みや感情を共感的に受容するための感受性を育むことにより、人権侵害を主体的に正しく見極めることができる生徒の育成につながっていくと考えられる。

① 地域クリーン作戦

(取組を始めたきっかけ)

本校では生徒会主催による「学区内清掃」として通学路の清掃を行っていた。また、各行政区では町内の統一日にクリーン作戦を実施していたが、中学生は参加していなかった。そこで、生徒だけで活動するよりも地域の方々と共に活動する方が安全であり、かつ地域の方々との交流も深まるので、クリーン作戦に参加させることにした。町内の行事に参加して地域の方々から認められる体験から、自己有用感を育てようと考えた。

(取組の内容)

年１回、５月の最終日曜日に、町内全域で各行政区ごとに行われるクリーン作戦に、全校生が参加する。

(取組の主体や実施体制)

茂木町の行事として、各行政区ごとに実施されている。

(取組を実現するにあたって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫)

部活動の大会や練習試合と重なる可能性がある。そこで、実施時期が５月の最終日曜日と決まっているので、その日は練習試合や部活動はもとより学校行事も行わないようにした。ただし、大会への参加は認めている。

② 那珂川河川敷清掃

(取組を始めたきっかけ)

那珂川には鮎や鮭が遡上してくるため、毎年多くの釣り客が訪れる。一部には釣り針や糸を投棄する、たき火をしたまま片付けない、鮭の卵だけを取って身を捨てていくといったマナーの悪さが見られ、初冬には河川敷がごみと悪臭で汚染されてしまう。そこで、ふるさとの清流那珂川の自然を保護し、来年も美しい河川敷で釣りを楽しんでもらうとともに、自分たちが享有している環境権を、自らの手で保持させていこうと考えてこの活動を始めた。

(取組の内容)

年１回、１２月上旬に全校生で学校近くの那珂川河川敷を清掃している。事前にごみの散乱状況を調査し、学年ごとに清掃場所を分担する。当日の朝、生徒集会で計画担当学年である２年生の実行委員が、清掃分担場所や清掃方法、往復・河川敷での注意事項等について説明する。２校時から４校時にかけて１時間半程度ごみの多い場所を重点的に清掃し、学校に戻ってからごみの分別をし、エコ・クリーン芳

賀中部に搬送する。

(取組の主体や実施体制)

２年生が環境学習の一環として計画し、学校行事と総合的な学習の時間に位置付けて全校生で活動している。ごみの搬送では保護者や学校支援委員さんの協力を仰ぎ、清掃活動には河井長寿会や茂木町漁業協同組合関係者の支援もいただいている。また、ごみの処理には茂木町環境課生活環境係、芳賀郡中部環境衛生事務組合に協力していただいている。また、学校から離れた河川敷への往復には、中川小学校のスクールバスを使用させていただいている。なお、河川敷での活動の安全管理のため、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所那珂川上流出張所に協力をいただいている。また、この活動資金として、財団法人河川環境管理財団の河川整備基金助成事業を利用させていただいている。

(取組を実現するにあたって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫)

河川敷清掃活動時期は鮭釣りシーズンの終盤であり、数は少ないが釣り客がいる。中にはマナーの悪い釣り客がいる恐れもある。そこで迷惑をかけてしまったりトラブルになったりすることがないように、清掃活動時には茂木町漁業協同組合の方々にパトロールをしていただいている。

清掃活動時にダムの放流によって増水し、中州から岸に戻れなくなる恐れがある。そこで、河川敷での活動許可と安全管理情報の収集のために、国土交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所那珂川上流出張所と連絡を取っている。その際、活動人数分の軍手とごみ袋をいただけるので助かっている。

投棄されたごみの中には危険物や有害物質が含まれている可能性がある。そこで、一般のごみ以外を見つけた場合には、引率の教員の判断で収集するようにしている。

③　環境学習出前講座

(取組を始めたきっかけ)

那珂川の汚染は、河川敷の汚れだけでなく水質の悪化にも及んでいることが分かった。つまり、自らの生活により水質汚濁が引き起こされているのではないかという問題が出てきた。そこで、汚れを取り除くだけではなく、始めから汚さない方策が必要ではないかと考えていたところ、茂木町内で「茂木町の川をきれいにする女性の会」の方々が環境問題の解決に取り組んでいることを知った。この方々の協力をいただき、生徒たちに河川やごみの問題だけでなく、自分たちが享有している環境権を、自らの手で保持していくための様々な方法を身に付けさせたいと考え、この出前講座を始めた。

(取組の内容)

各学期に１回ずつ年３回、２年生が環境学習の一環として実施している。第１回出前講座では、茂木町の川をきれいにする女性の会の発足から現在までの取組についての話を聞く。その後、身近な川や池、水たまり、家庭排水などから各自が採取してきた水で、パックテストを用いた水質検査の実習する。その際、米のとぎ汁が水質汚濁にあまりにも大きな影響を与えることを知り、各家庭から持参した米のとぎ汁と茂木町の川をきれいにする女性の会からいただいたＥＭ菌等の材料を用いて、ＥＭ菌発酵液をつくって持ち帰る。数日後にできあがったＥＭ菌発酵液を家庭で使用し、台所から川の水質保全に貢献する。

第２回出前講座では、廃油石けんづくりを体験する。材料は、給食センターから揚げ物の調理に用いた廃油を譲っていただき、薬局で苛性ソーダを購入する。給食に出たゼリーや豆腐などのカップを全校生から集め、石けんを固める型として再利用する。完成した石けんは袋に詰め、全校生及び学校祭に来校した方々に、那珂川の水質保全を訴えながら配布する。

第３回出前講座では、アクリルたわしとエコバッグづくりを行う。アクリルたわしは、材料となるアクリルの毛糸を購入し、編み棒や指で好きな形に編んでいく。持ち帰って使用することで、使用する洗剤の量を減らすことができる。エコバッグは、各自が持ち寄った古新聞を用い、糊で貼り付けながら組み立てていく。長持ちはしないが、新聞紙の再利用とノーレジ袋運動に役立てる。

各出前講座実施後には、全員に講師の先生あての礼状を書かせて自己を振り返るとともに、感謝の念を深くしている。

(取組の主体や実施体制)

２年生が環境学習の一環として計画、実施している。茂木町の川をきれいにする女性の会の方々に、各回２～３名を講師として協力していただいている。また、給食センターから廃油を、全校生から石けんを固めるカップの提供を受けている。各回とも２時間ずつ総合的な学習の時間に位置付けて行っている。

(取組を実現するにあたって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫)

年間計画で実施期日を決めてはいるが、講師の派遣を依頼するため、先方の都合に合わせて最終決定しなければならない。そこで、時間割の組み替えで対応するとともに、できる限り学年担当教員の出張が少ない期日に実施できるようにしている。

廃油石けんをつくる際、劇物である苛性ソーダを用いるので危険である。そこで、マスク、エプロン、ゴム手袋を各自が持ち寄り、目を保護するために理科実験用のゴーグルを理科室から借りている。

廃油石けんは、環境にやさしいとは言っても、廃油特有のにおいから敬遠されが

ちである。そこで、アロマオイルなどの香料を入れることにより、多くの方々に使用していただけるように工夫している。

４．実践事例の実績、実施による効果

(取組の実績)

① 生徒の振り返りから

クリーン作戦に参加した後、生徒の振り返りのなかに、「普段あまり気にせずに走っている通学路が、たばこの吸い殻やごみの不法投棄でこんなに汚れているのかと気付いた。ごみの投げ捨てをしないように気をつけたい。いつもきれいにしておきたい。」という意見が見られた。

河川敷清掃の振り返りでは、「ごみを捨てるのは簡単だけれど、拾うのはとても大変なので、その大変さを捨ててしまう人に伝えたい。」「ごみがなくなるようにできるだけリサイクルする。」「誰かのため、何かのためにやったのだから、絶対に喜んでくれる人がいる。だから『いや』とは思わず自分にできることを精一杯やりたい。」「自分が住んでいる中川地区を今のまま残せるようにこれからもボランティア活動に参加したい。」「那珂川を再び関東一の清流にしたい。」「地元はもちろん、知らない土地に行ってもごみは捨てないようにしたい。」といった意見が見られた。

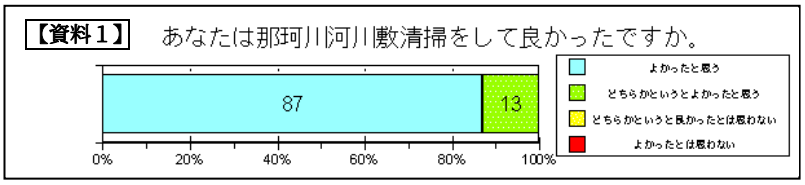
以上のことから、生徒による自主的・体験的な活動を通して、自己有用感や自尊感情が高まるとともに、環境を守ることが自他の人権を守ることにつながるということに気付いたことにより、人権侵害を主体的に正しく見極めることができる生徒に近づいたと考えられる。また、那珂川に限らず身の回りの環境を積極的に自分の手で守るだけでなく、こういった活動を広げていこうとする態度やボランティア精神も育っていると考えられる。

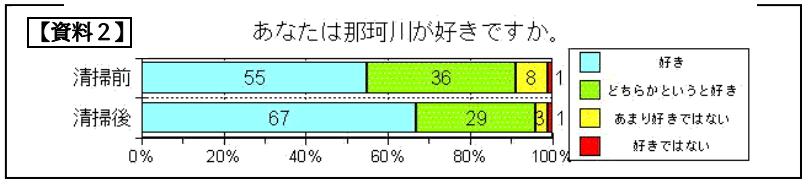
環境学習出前講座の後の振り返りでは、「ＥＭ菌発酵液の効果を試してみたい。近所の人にも教えてあげたい。」「廃油石けんは靴の汚れがよく落ちるそうなので、今度自分で靴を洗ってみたい。」「アクリルたわしが上手にできたので使ってみたい。今使っているたわしがなくなったら買い換えずにアクリルたわしを使いたい。」「このような活動は小さなものかも知れないが、繰り返していけば大きなエコにつながると思う。今後もエコに気を付けて生活していきたい。」「このほかのエコ活動も調べて環境にやさしい生活をしたい。」といった意見が見られた。

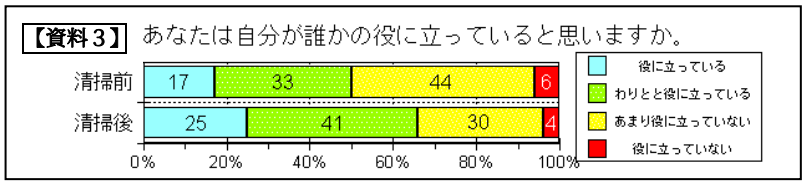
以上のことから、汚れを取り除くだけではなく、始めから環境にやさしい生活をしようとする意識と自分たちが享有している環境権を、自らの手で保持していくための技能を身に付けさせることができたと考えられる。

② 河川敷清掃のアンケート調査から

本校の生徒には、もともと那珂川が好きな生徒が多かったが、ひどいごみと悪臭の中で清掃活動をしてもなお、全員が河川敷清掃をしてよかったと思っている【資料１】。そして、那珂川が好きな生徒が増えてきた【資料２】。つまり、大切な那珂川をこれから先もきれいにしていきたいという気持ち、そして自分たちが享有している環境権を、自らの手で保持していこうとする意識が育ってきたものと思われる。また、自分は誰かの役に立っているかという質問に対しても、自分が役に立っていると感じている生徒が大きく増えてきた【資料３】。郷土を愛し美しい自然を残していこうという郷土を愛する心とともに、自らが貢献しているという事実に基づいて自尊感情も高まってきたと考えられる。







(取組が効果を上げた実際の事例)

河川敷清掃を始めて３０分ほどすると、次第に疲れて集中しなくなってくる生徒も出てくる。しかし、河井長寿会の方々と一緒にごみ拾いをしたときには、長寿会の方々は決して体力があるわけでもなく足元が不安定であるにもかかわらず、生徒たちよりも速い動きで黙々と活動していた。それを見た生徒たちは、長寿会の方々の元気さと拾ったごみの多さに驚いていた。それ以来、仕事は真剣にやらねばならないということに気付いたようだった。そして、力を合わせてきれいにすることにより、自分たちが享有している環境権を、自らの手で保持していく活動に満足していた。また、途中で休憩をしながら長寿会の方々とお話をしたときには、和やかな雰囲気で交流を深めることもできた。

以上のことから、地域の方々との協働が、取組の効果を高めたと考えられる。

(取組の実施から得られた知見・経験により改善を図った事項)

① 那珂川河川敷清掃

収集したごみのうち、家電製品等エコ・クリーン芳賀中部で引き取っていただけないものがでてきた。そこで、このようなごみについては拾わないように指導するとともに、引率の教員の判断で収集するようにしている。

収集したごみの量は軽トラックで３台分になることもあり、中には粗大ごみもあって生徒の力だけでは学校まで運べないので、河川敷から学校までの運搬を学校の軽トラックで何往復もしていた。そこで、保護者や学校支援委員さんに事情

を話して運搬をお願いするようにした。

地域住民から、学校から離れた河原にも汚れている場所があり活動してくれないかとの依頼があった。始めは自転車で往復していたが、清掃時間が短くなるとともに交通事故の危険性も考えられた。そこで、中川小学校のスクールバスを借りて往復することにした。

このように、保護者や地域の方々と共に活動することにより、地域の連帯感を高めることができた。さらに、地域の方々の人権意識を向上させるきっかけにもなったと思われる。

② 環境学習出前講座

ゼリーや小型の豆腐の入れ物などを石けんの型に用いているため、幼児が石けんをお菓子と間違えて誤飲してしまった。そこで、配布の際に幼児に渡すことは避けるとともに、袋に注意書きを入れることによって誤飲防止の対策を取っている。

５．実践事例についての評価

（取組についての評価、及びそう評価する理由）

クリーン作戦や河川敷清掃だけでは、ごみを捨てないといった環境保全への意識と郷土愛は高まるが、ごみ拾いという自然破壊に対する対処法しか身に付かなかった。しかし、環境学習出前講座を取り入れることで、環境保全に対して様々な角度から取り組むための視点と、環境破壊を起こさないためにだれでもできる方法を身に付けさせることができたということが、環境学習出前講座後の生徒の感想や行動から分かった。

このように、体験活動と環境学習を組み合わせることで、体験活動の意義を理解し、体験活動から得られる喜びや達成感、自尊感情を一層高めることができた。

また、自分たちが享有している環境権を、自らの手で保持していこうとする意識が生まれ、人権侵害を主体的に正しく見極め、自他の人権を共に守ろうとする生徒の育成につながったと考えられる。

（保護者や地域住民からの反応）

那珂川河川敷にはごみや不法投棄、魚の死骸の散乱がひどかった。しかし、中学生が目の前で清掃しているのを見ているためか、「近ごろはごみや死骸の投棄が減ってきた。」、「ありがたい。」と、地域の方々から聞くことがある。

保護者の方々から、「廃油石けんで靴を洗うとよく落ちるので重宝しています。」という意見を聞くことがある。

（現在、実施にあたって課題と感じていること）

これらの多くの活動を実施するには多くの時間が必要となる。現在でも授業時数がようやく確保できるという状況である。来年度から新教育課程を全面実施することにより、学校行事等の削減をしなければならない。その中でこれらの活動を続けていくには、今以上の努力と工夫が必要である。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

茂木町立中川中学校
地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている事例である。 環境教育を中心にして「地域クリーン作戦」,「那珂川河川敷清掃」,「環境学習出前講座」など，独自性を有した教育実践が行われている。 また,「生徒の振り返り」,「河川敷清掃のアンケート調査」,「保護者や地域住民からの反応」など，具体的な評価・検証方法により，実践の効果を高めている。 郷土の自然環境を守るために学校・家庭・地域等が連携・協力して、「地域との協働による環境学習と清掃ボランティアの取組」を実施することで、成果を上げている。